

第8章

国立故宮博物院（台北）

——創立 70 周年と 80 周年における歴史認識の差異——

松金公正

要約： 現在の台湾社会は凝集性を高めようとしているのか、それとも発散する傾向にあるのか。

本稿は、中国への統合を支える概念としての「中華」に着目し、この中華という概念が、戦後台湾社会の中でいかなる変化をとげてきたのかを台北にある国立故宮博物院の近年の動きを通じて整理することを目的とする。

2000 年の政権交代以降、本土化を推し進め、台湾を統合する概念を中華から本土化へと変えようとした民主進歩党政権下の 8 年間において、台北故宮ではいかなる変革があったのか。その流れを概観するとともに、とくに設立 70 周年時と 80 周年時に見られた博物院自身の自らの沿革に対する歴史認識の差異を通じて、台湾における中華の位置づけが台北故宮とどのように関わっているのかについて呈示する。

キーワード： 国立故宮博物院（台北）、中華、本土化、秦孝儀、石守謙

はじめに

1. 問題の所在

現在の台湾社会が凝集性を高めようとしているのか、それとも発散する傾向にあるのかを、中国への統合の力に対する作用・反作用という角度から捉えることは、本研究会のひとつの目的であるが、その統合を支える概念のひとつとして、「中華」というものを呈示することは可能であろう。

それでは、この中華という中国への統合概念は、戦後の台湾社会の中でいかなる変化をとげてきたのであろうか。かかる問題意識に立った場合、本稿で取りあげる台北にある国立故宮博物院（以下、台北故宮）は、その成立の経緯や設立後の文化・教育的機能といった側面を考えるまでもなく、台湾島内においても、中国本土においても、そして海外においてももっとも一般的に中華を象徴するものとして取り上げられるもののひとつである。そのため、従来台湾において台北故宮がどのような存在と位置づけられてきたのかを分析

することは、すなわち台湾において中華がどのようなものとして位置づけられてきたのかを知る重要な手がかりとなるものといえるのではなかろうか。

そこで本稿では、2000 年の政権交代以降、本土化を推し進め、台湾を統合する概念を中華から本土化へと変えようとした民主進歩党（以下、民進党）政権下の 8 年間において、台北故宮では、いかなる変革が起ったのか、その流れを概観するとともに、台湾における中華の位置づけが台北故宮とどのように関わっているのかについて呈示したい。

まず、第一節では、台北故宮の歴史を概観する。次いで第二節では、民進党政権下で台北故宮において、いかなる改革が行われたのかを行なったのかを整理する。さらに、2008 年の中国国民党（以下、国民党）への政権交代後にいかなる変化が見られたのかについて論及する。そして、第三節では、国民党政権下の故宮設立 70 周年と、民進党政権下の故宮設立 80 周年において、呈示された沿革に見られる差異を手がかりに、台北故宮をいかなる存在としようとしていたのかについて論及することとする。

2. 先行研究

故宮に関する書籍としては所蔵品の解説や研究書、また、所蔵档案を利用した研究論文等は数多い。しかしながら、その一方で故宮の歴史的経緯や変遷について、故宮自身の档案を使い、上記のような視点から故宮を読み解く研究はこれまであまりみられない。

先行研究としては、周密[1985]、馮明珠[1994]、吳淑瑛[2003]、家永[2007]、板倉[2008]などがあげられる。

このほか、故宮博物院が 70 周年を記念して編纂した『故宮七十星霜』（故宮博物院編撰[1995]）¹がある。同書は、那志良[1957, 1966]などを踏まえて書かれたものであり、多くの内部資料に基づく検証がなされており、故宮の変遷を追ううえで大変参考になる。また、文物の中国大陆からの移動の経緯については、杭立武[1980]があり、中華文化復興運動との関係に注目したものとしては、蔣復璁[1977]がある。さらに、日本人向けの書籍としては、所蔵品に関する解説書や専門書が数多く出版されているが、設立の歴史的経緯などを含めつつ一般参観者向けに簡便に書かれたものとして、林[1974]、古屋[1992]、小暮[2008]などがある。

第 1 節 台北故宮の沿革

本節では、台北故宮がいかなる変遷をたどって現在に至っているのかについて概観する²。

一般的に故宮博物院とは、北京及び台湾にある中国の歴史文物を収蔵している博物館・美術館のことを指す。北京のものは紫禁城内にあり、正式名称は「故宮博物院」、台湾のも

¹ 同書は 1996 年に温井禎祥によって日本語に翻訳され国立故宮博物院から同書名で出版されている。

² 本節の記述は、松金[2009]に加筆・修正を加えたものである。

のは、台北市郊外の士林区にあり、正式名称は「国立故宮博物院」という。また、このほか、遼寧省の瀋陽に「瀋陽故宮」と呼ばれる施設がある。

「故宮」とは、もとの宮殿の意味で、明朝の北京遷都以降建設され、清朝最後の皇帝宣統帝にいたるまでの歴代の皇帝の宮城であった紫禁城、および清の入関以前、瀋陽に置いていた宮城のことを指す。北京故宮は、旧紫禁城を博物館として利用しているため、「故宮」と名づけられている。それに対し、台北故宮は、宋、元、明、清の四つの王朝の宮廷に収集・保存されていた文物を主要なコレクションとしており、これらは、中華民国・国民党政府によって、旧紫禁城から台湾へと移送されたものである。2008 年 1 月に定められた「故宮博物院組織法」によると、「旧国立北平故宮博物院および国立中央博物院籌備処の歴代古文物および美術品の整理、保管、展示、並びに古代中国文物と美術品の収集、研究、普及活動により社会的な教育効果を高める」ことをその設立の主旨にうたっている。つまり、展示物の多くがもともと紫禁城に所蔵されていた皇帝のコレクションであったことから「故宮」と名づけられていることがわかる。ただし、台北のコレクションは、このほか、国立中央博物院籌備処（現在の南京博物院）に所蔵されていた文物や台湾に移動した後に収集された文物などから構成されており、すべてが「故宮」のものとは言えない。

辛亥革命によって成立した中華民国は、1914 年に熱河の避暑山荘と瀋陽故宮の清朝皇室の文物などを紫禁城外廷に集め、古物陳列所を設立して一般に開放した。さらに、1924 年にすでに退位していた宣統帝溥儀を紫禁城から退去させた後、清室善後委員会を設立し、所蔵文物の整理を始めた。その後、旧紫禁城の敷地を利用して 1925 年 10 月 10 日（国慶節）に故宮博物院が成立し、一般への公開を始めた。1928 年 6 月に国民党政府の北伐軍が北京に至ると、易培基が故宮博物院を接收し、1929 年 2 月には易培基は院長に任命された。

1932 年 7 月に入ると、満洲に侵攻していた日本軍が華北へ迫る可能性が高まった。国民政府は、故宮博物院の所蔵品を日本軍から守るために、所蔵文物を選定して箱に詰め、移送できる準備を整え、1933 年にまず上海まで運んだ。同年馬衡が院長に任命された。1934 年 2 月、国民党政府は「国立北平故宮博物院暫行組織條例」を公布し、故宮を行政院の管轄とした。1936 年 12 月には、上海から南京朝天宮に 19557 箱の文物が運ばれ、翌年 1 月、故宮博物院南京分院が設立された。しかし、日本軍の進攻とともに、文物もさらに中国内陸部へと移動せざるをえず、最終的に四川省巴県、樂山、峨眉に運ばれることとなった。古物陳列所の文物もまた故宮文物と同様に移送されることになり、国民党政府が近代的な博物館の建設を目指して 1933 年に南京に設置した中央博物院籌備処に編入された。

1945 年、日本の敗戦により、巴県、樂山、峨眉の文物は重慶に運ばれ、1947 年、重慶から南京まで移送された。ところが、1948 年に入ると、国共内戦において敗色が濃厚となった国民党政府は、文物のうち重要なものを選定して台湾へ移送することにした。そして最終的に計 2972 箱が 3 回に分けて台湾まで運ばれることとなった。この時、中央研究院歴史語言研究所の考古発掘資料や拓本、国立中央図書館の善本、国立中央博物院の文物なども

台湾へと運び出された。

紫禁城に残されていた文物や北京へと返送された文物は、1949 年 1 月に人民解放軍によって北京が解放されると、共産党によって接收されることとなった。当時の院長馬衡は国民党政府の再三の要求にも関わらず、文物の北京から流出を認めなかった。同年 10 月に中華人民共和国が成立すると、中央人民政府文化部文物局の指導の下で運営されることになり、1954 年には呉仲超が最初の院長に任命された。

一方、台湾では、1949 年に国立中央博物院聯合管理处が設立された。同処は、台中県霧峰郷北溝に倉庫を建て、故宮博物院・中央博物院・中央図書館から台湾に移送された文物の管理を行なった。1957 年には、北溝陳列室が正式に開放され、一般に公開されることになったが、同陳列室の面積はたいへん狭かったため、台北市外双溪に新館を建設することとなった。新館は孫文生誕 100 年周年を記念して「中山博物院」と名づけられ、1965 年 11 月 12 日に開館式典を行った。初代院長は蔣復璁である。その後、中国本土の文化大革命に対し推進された中華文化復興運動の中で、故宮は中華民國こそが中華文化を正統に継承しているという主張を強調する役割を果たすことになる。

2000 年の政権交代により民進党が執政政党となると、杜正勝が院長となり、「故宮の新世紀」と銘打ち、学術研究の強化、国際交流の促進を進めることとなった。また、2007 年 2 月には、本館の全面的なリニューアルを終えた。この間、アジア博物館としての位置づけを与えられた国立故宮博物院南部院区(故宮南院)を開設するといった計画も出される。国民党の立法委員からは、台北故宮もまた民進党政権の本土化の中で、「脱中国化」を進めているのではないかとの疑義も加えられた。

2008 年に国民党が政権を回復すると、北京故宮との関係を強化し、両者の交流促進を進めている。

以下、2000 年の民進党政権の成立から、2008 年の国民党による政権再交代のなかで就任した歴代院長が、自ら台北故宮をどのような博物館と規定しようとしたのかについて整理することとする。

第 2 節 民進党政権樹立以降の台北故宮の変容³

1. 杜正勝院長 (2000 年～2004 年)

2000 年の総統選挙で陳水扁が勝利し民進党の政権が成立すると、1983 年から院長を務めていた秦孝儀の後を受け、それまで中央研究院歴史語言研究所の所長であった杜正勝が院長に選出されることとなった。杜は「故宮新世紀」を打ち出し、学術研究を強化するためシンポジウムを開催し、本土・中華・国際を兼ね備えた多元文化観を強調したほか、第

³ 本節は松金[2010]の一部に加筆・修正したものである。

五期拡充として本館の改築計画を進めるとともに故宮南部院区設立企画を始動させた（林曼麗編[2007: 203]）。そのなかで、故宮の位置づけに関して従来とは異なる見解を提出した（杜編[2002: 2]）。

「国立故宮博物院」は台湾に立脚してすでに五十年を過ぎ、中国大陆に設置していた時の時間より長く成っています。1949 年に組織条例を研議し、「中央博物院籌備処」と「故宮博物院」を合併し、聯合管理处を設けました。当時の環境と思潮は、中央博物院の新しい学術伝統をなおざりにし、「故宮」の名を採用し、世間では本院と北京故宮博物院を混同させたり、さもなくば、本院を北京故宮博物院の余脈と見たりする結果に至らしめました。これは自ら縛りつけるパターンで、本院発展に対する束縛は、今尚解くことが難しい状態です。

私は歴史を学ぶ者で、わざと既存の歴史事実を抹殺することはしませんし、存在している歴史記憶を忘れることもしません。本院と北京故宮博物院の源に関しては、本書の「本院の歴史と概況」と「略年表」にはっきりと説明してあり、過去のなおざりにされて来た中央博物院籌備処との関係を、今改めて詳しく見てみなくては成りません。国立故宮博物院はこの二つに根源を置いてはいるものの、台湾に移転して半世紀の間に形成された風格は、いずれの組織に頼らなくてもよい十分な条件をすでに備えています。

つまり、台北故宮の起源としては、1925 年に北京紫禁城に成立した、国立故宮博物院とともに 1933 年南京で設立が計画された中央博物院籌備処をあげることができる。そして、科学研究を奨励し、知識を広め、自然科学、人文科学、現代工芸に及ぶ国家の文物を保管し、展示・陳列することによって社会教育に資するといった新しい学術の精神を基礎とする近代博物館として企図されたのであり、中央博物院の存在は決して軽視してはいけないとする（杜正勝[2001]）。

また、以下のように収藏品に関して、大陸を離れた後に収集された文物が含まれていると強調する（杜編[2002: 2]）。

本院収藏品の来源は紫禁城の故宮だけに留まるだけでなく、中央博物院籌備処の文物、及び台湾で購入したものや寄付を受けたものがあります。

つまり、故宮の収藏品は、①北平故宮博物院、②中央博物院籌備処、③台湾おける収集、寄付受領資料の三つから構成されていると言うのである。そして、以下のような目標を掲げた（杜正勝[2001]）。

①政治性からの脱却：芸術文化の本質への回帰

②多元化・大衆化・国際化：同心円史観、社会との関連性の重視、国際交流の推進

③研究・教育・レジャー：学術研究への寄与，芸術教育の推奨，芸術の生活化

④制度改革：国立故宮博物院組織条例の改正

⑤建設：本館の改築，故宮南部院区の建築

2. 石守謙院長（2004 年～2006 年）

2004 年 5 月，杜が教育部長に転任したため，副院長であった石守謙が院長を引き継いだ。石は台湾外の博物館との文化交流を推進したほか，本館及び南部院区の建設を進めた（林曼麗編[2007: 203]）。また，2005 年 10 月の建院八十周年に臨み，台北の建物が建設された 1965 年を画期とし，四十年間を一期とし，これからの第三期目が始まるという視点を示した（石守謙[2005: 4]）。

そして，この四十年來の最も大きな意義を，現在の台北故宮の建設と所蔵文物の一般への公開と位置づけている。これにより台湾住民が伝統文化のもつ美しさを実感でき，海外の人々に中華文化の素晴らしさを味わってもらうことができるようになったとしている。つまり，対外的な中華文化の呈示，そして台湾内にむけた伝統文化の宣揚が着実に行われてきたことを評価していることがうかがえる。

そして，これらを踏まえた今後の目標としては，国際化や科学技術やデジタル化への志向が強調されるとともに，参観者の目線に立った全国民のための博物館になることが打ち出されている。そこには，台北故宮所蔵の文物を，単に深く理解するという歴史的な価値をもっただけのものでなく，その理解を通じて二十一世紀における新たな文化の創出へとつながるものと位置づけようとする考えが伺える。このような考え方は次ぎの院長である林曼麗と共通する部分を含むものといえる。

3. 林曼麗院長（2006 年～2008 年）

2006 年 1 月に副院長であった林曼麗が院長に昇格した。就任して打ち出したキャッチフレーズが“Old is New”というものであった。なぜそのような言葉を使ったかについて，林は以下のように答えている（林[2007: 82]）。

古いものをただ置くだけでは駄目。現代の生活との間にブリッジをかけなくては。そして新しい文化，新しい美学を創造的につくりだす，それが本当の文物の意義というものでしょう。昔のものは昔のものと，現代から切り離さないでほしい。でもまだ台湾の文化界では，故宮は古いもの，コンテンポラリーはコンテンポラリーという考えが多くて。

そして，外部の建築家，デザイナー，キュレーターとの協働，新たなテクノロジー，マルチメディアの活用を積極的に活用する理由については，以下のようにコメントする（林

[2007: 82])。

いま古典とされているものだって、つくられた当時は前衛だった。その時代の一番ハイテクなものを使って、新たな地平を切り拓いていったはずです。

つまり、林は「前衛であれ、古典であれ、すべては芸術」(森[2008: 29])という視点から、故宮と向き合おうとしていることがわかる。しかし、故宮にはこれまでの「古典」という枠組みがあり、そこに“Old is New”を持ち込む理由として、林は以下のような時期区分をあげる(森[2008: 29])。

故宮博物院は創立してから今年で八十一年を迎えます。私はその歩みを四十年を一つのサイクルとして見てみようと思います。まず、1925 年から 65 年までが第一段階、台湾に故宮博物院が創建された 1965 年から 05 年までを第二段階とします。すると今年ちょうど第三段階のはじまりに当たります。

この時期に任命を受けた私は、第二段階の基礎をもとに、一層の飛躍を、故宮の影響力を到る所に広げて、人々の心に浸透させ、台湾の社会にしっかり根づかせていきたいと考えています。

そして、第三段階の新たな展開として、「故宮は宝蔵ではな」く(林[2007: 83])、「文化を流動的美学と捉えると、博物館は死んだものの墓地ではなく、故宮を活性化させる有機体とみなすことができ、それは人類の文明に大きな役割を果たすものとなる」⁴と可能性を示し、「故宮は華夏(中国)文化の優れた文物をコレクションにしていますが、今までのように保存し研究し展示するだけではなく、これからは文物がもっている力を、如何に発揮して、新しい文化を創りだしていくか、それが大事です」(森[2008: 29])と新しい文化の創造を提案する。さらに新しい文化の創造にとって最も大切なものは「人間の存在」(森[2008: 29])とする。そして、故宮はこれまで文物が主役で、文物だけを大事にしてきたが、これからは文物を見る人間が主役になるべきだと考えているとし、台湾人が積極的に故宮と向かいあうことによってこそ新たな文化を生み出す可能性があると論じる。

今までのように消極的に中華文化と向きあうのではなく、これからは台湾人が主体になって、文物を利用し、如何にして新たなものを創造していくか、それが大事です(森[2008: 29])。

⁴ 筆者による林曼麗へのインタビュー(2007年3月15日)。

今までの故宮の責任者、台湾の研究者は中国の文物を保存し研究する、また台湾の人々の誰しもが外双溪にたくさんの宝物があることは知っている、ただそれだけでおしまいでした。実に、故宮博物院にたいして消極的な態度でした。台湾との繋がりには薄かったのです。今まで故宮博物院は、自分との生活、自分との文化、自分との人生と無関係な存在でしかなかったのです。それを変えるために、私は任命されたと思っています（森[2008: 30]）。

ここで林は、これまで台湾の人々は台北故宮に対して「消極的」であったと繰り返す。さらに「台湾との繋がりには薄かった」、「今まで故宮博物院は、自分との生活、自分との文化、自分との人生と無関係な存在でしかなかった」と述べる。これは言い換えると、台湾の人々に中国・中華の伝統文化を内在化させることを、その目的の一つとした台北故宮であったが、必ずしもその試みは十全に果たされていたわけではなかったことがわかる。そして、林は第三段階の故宮の姿を台湾人が新しい文化を創造する場と規定する。そして、それを実現するためには、博物館を固定的なものではなく流動的なものとして、また主役は文物ではなくそれを見る人間であると認識し、積極的な態度で故宮と向きあう必要があると言う。

4. 周功鑫院長（2008年～）

2008年3月に行われた総統選挙の結果、中国国民党の馬英九が勝利を収めた。これにともない政権与党は周功鑫を新しい院長に任命した。周はその就任に当たって以下のような文章を寄せている⁵。

博物館の経営理論から言えば、博物館はまずその使命を確立し、明確にさせる必要があります。そうすれば将来の発展の方向性を定めやすくなります。博物館の世界では「収蔵品は博物館の心臓」という言い方があります。国立故宮博物院の心臓は、中華文化に伝わる文物と芸術品です。これら収蔵品の管理や保存、研究、展示、教育・推進等の作業を行うことで、故宮博物院はその機能をすべて発揮し、使命を遂行することができます。また、これにより自然と故宮博物院の特色をアピールすることもできます。これは誰の目にも明らかな発展の方向です。これらを怠れば困難が生じ、故宮博物院が発展することは難しいでしょう。再び故宮博物院に戻って来た私は、皆の先頭に立って故宮博物院の使命を背負い、未来に向かって大きく歩みを進めていきたいと考えています。

ここで周は、「収蔵品は博物館の心臓」という言葉を使ったうえで、台北故宮の心臓は「中

⁵ 本刊（『故宮文物月刊』）整理「承担使命・開創未來—周功鑫院長談話録」（『故宮文物月刊』304, 2008年）、4頁。

華文化に伝わる文物と芸術品」である旨強調している。そして、それらに関して、管理、保存、研究、展示、教育・推進等の作業を行うことこそが台北故宮の使命であるとする。つまり、台北故宮の使命や目的をあらためて明確化し、その中心に「中華文化」を据え、その点を特色としてアピールしている。

このような立場は、林の“Old is New”とは一見違った局面を重視しようとしているようにも見えるが、このほか周は就任に当たって、博物館をひとつの産業として考える立場を示し、先端科学技術を使った保存・修復を行うほか、資料のデジタル化を進め、台北故宮がもつ近寄りがたい雰囲気を解消するために若者たちに芸術活動の場を与え、国際交流を推進し、そして、台湾における文化創意の基礎的役割を果たすための「文化創意産業育成センター」を設置するといった方向性を示しており、台湾社会に対して、台北故宮はいかなる役割を果たしていくのかという点については、林と同様に重視する方向性が示されている。さらに、周は北京の故宮博物院との間での展示・学術面での交流を積極的に進めている。

第3節 台北故宮創立 80 周年

さて、前述したように、台北故宮は 2005 年 10 月に創立 80 周年を迎えた。その際、院長であった石守謙は、これまでの歴史を以下のように振り返っている（石守謙[2005: 4]）。

國立故宮博物院在二〇〇五年的十月就要慶祝建院八十週年。回想這八十年的歷程，故宮的故事恰好可以用台北院舍建立的一九六五年界分為前後兩個階段。前面的階段可以說是以保護，典藏國寶為主，後個四十年才是真正發展其學術，教育，文化功能的階段。

一九二五年清廢帝溥儀出宮，原來北京紫禁城中的清宮收藏終於合法地由中華民國政府接管，在清宮原址成立了故宮博物院。這批珍貴的藝術文物收藏不僅是滿清一朝近三百年搜集的成果，而且至少可以上溯至第十世紀，是近千年歷代皇帝苦心經營的累積所成。這不僅是世界文明史中獨見的現象，更被尊為中華文化悠久傳統的結晶，具有延續國族命脈使命的國寶。可惜，初期的故宮並不能如願地執行它作為博物館的工作。為了躲避戰火的威脅，故宮中最重要的收藏被迫裝箱離院，開始一個長達四十年，顛沛流離的辛酸歷程。先是到中國南方的上海，南京，後又遷徙至內陸的貴州，四川，最後終於落腳台灣。在這過程中，同仁無私無悔的投入，突破千萬種困難，圓滿的達成了保護國寶的任務。它本身即是一部動人的傳奇。

但是，故宮之作為一個博物館，卻要看到一九六五年在台北設館才真正開始。除了建造山洞庫房，並逐步改善保存設施，特續既有的維護國寶的任務之外，典藏的編目整理配合著研究工作的開展，也帶動了出版事業的進行。透過目錄，圖集以及學術期刊的發行，故宮的這批重要文物收藏之大貌，逐步公諸於世，並在對內容的理解上，終能繼十八世紀

乾隆皇帝初步奠基之後，首部推進至一個全新的層次。不過，此期最重要的意義主要來自於展覽的開放。在力求合乎現代博物館展示環境條件之嚴格要求下，故宮這些久藏於箱篋之中的珍貴藝術文物，終能一一地展現在觀眾面前。這不僅讓國人得以親身體驗傳統文化之美，而且也提供了國際友人探索中華文化精華的最佳管道。

在進入二十一世紀之後，國立故宮博物院也有新的自我期許。在前人既有的努力成果的基礎上，故宮希望能更朝觀眾導向的理想前進，並以全民化，國際化的目標來鞭策自己。在展覽，教育工作中，科技整合的研究取向以及數位科技之運用特別值得加以強調。我們深心，經過這些努力，故宮所珍藏的珍貴藝術文物，不僅能得到更深入的瞭解，也可以為創造二十一世紀的新文化做出更多的貢獻。

（日本語訳）

国立故宮博物院は二〇〇五年十月に創立八十周年を迎えます。これまでの八十年間の歴史を振り返ると、故宮博物院の歩んできた道は台北院舎が建設された一九六五年を境に、その前後の二つの段階に分けることができます。一九六五年以前の四十年間は国宝の保護と収蔵が中心でした。その後の四十年は、真に学術、教育、文化的機能を発展させた時期であると言えます。

博物館としての故宮博物院の歴史は、一九六五年の台北院舎設立によって正式に始まりました。この時期の最も重要な意義は、展示物の一般公開を開始したことにあります。現代的な展示環境や条件といった厳しい要求にできるだけ対応するため、故宮博物院は長い間箱の中に入れて保管してきた貴重な芸術品や文物を、ついに一つ一つ参観者に披露することになりました。これによって台湾の住民は、伝統文化の持つ美しさを実感できるようになり、海外から台湾を訪れた人たちにも、中華文化の素晴らしさを味わってもらう最良の方法を提供することになりました。

二十一世紀に入り、国立故宮博物院にも新しい目標ができました。それは、これまで先人が努力して築き上げた成果を基礎に、より参観者の目線に立つという理想に向かって邁進することです。そして、全国民のための故宮博物院になること、国際化すること、という目標のために自分を叱咤激励することです。展示と教育の方面では、総合科学的な研究方針とデジタルテクノロジーの運用という点を特に強調したいと考えています。こうした努力によって、故宮博物院が所蔵する貴重な芸術品や文物がより深く理解されるだけでなく、二十一世紀の新たな文化を切り開くに当たって、より多くの貢献をすることができると深く信じています。

ここで石は、故宮の 80 年の歴史を台北に現在の博物館の建物が建設された 1965 年を境に前半の 40 年と後半の 40 年とに分け、前半の 40 年間は、国宝の保護と収集を中心とした時期で、後半の 40 年間は、学術、教育、文化機能を発展させた時期としている。そして、

そのような発展を生み出した後半 40 年の最も大きな意義は、「所蔵文物の一般への公開」としている。さらに 80 周年を迎えた 2005 年から第 3 期目が始まるという新たな視点を示した。

このような故宮の沿革に対する歴史認識は、従来のものとは大きくことになっており、とくに 70 周年時の院長である秦孝儀のものと比較すると、その違いは顕著である。

以下は、1995 年 5 月 24 日に中国国民党中央常務委員会において秦孝儀によって「国立故宮博物院工作報告-從宮廷博物院邁向民族博物院 進而至於世界級博物院之新境界-」というテーマで報告されたものの冒頭部分である。

孝儀今天受命報告故宮博物院工作，恰值故宮建院七十週年，謹以「從宮廷博物院邁向民族博物院進而至於世界級博物院之新境界」為題，提出簡要報告。

總理領導革命，建國成功，清廢帝溥儀受到優遇，仍然住在清宮，直到民國十三年方始遷出。十四年雙十節在清宮原址成立了故宮博物院。於是始自北宋的宮廷收藏，私於皇室一姓者，於今竟得公之於世，真正成為「民有，民治，民享」之大眾博物院，這是民國造肇，「主權在民」的重要成就。

回顧過去，大致而言，民國十四年至二十四年的第一個十年，重在清點整理及開放展覽，惜規模粗具，即遭逢「九一八」事變，北平岌岌可危。其時蔣委員長以故宮珍藏，乃歷代文物菁英，不可不有適當的安全措置，於是毅然決然展開古物南遷的行動。

民國二十四年至三十四年的第二個十年，盡是流離遷徙的艱苦歲月。故宮文物，為避開日寇戰火，由北而南再轉徙至於西南，經過一萬二千公里的間關跋涉，藉著簡陋的交通工具運送，上有飛機炸彈威脅，後又有大砲機關槍追趕，歷經諸多劫難，仍能安抵西南大後方，文物且無任何損傷或遺失，達成了維護國寶重器的任務。

民國三十四年至五十四年兩個十年裡，為故宮的沈潛時期。抗戰勝利還都，卻又遭逢共軍叛亂，總裁乃再度下令，文物播遷來台，暫存台中霧峰，至四十六年才開闢了一個小型的展覽室對外開放。

民國五十四年至六十四年的第五個十年，是故宮在台的復院時期。政府於百廢待興之際，五十四年在台北市外雙溪現址，完成建館奠基的工作。雖規模不大，但已具備現代化博物館之雛形，這裡從此成為中國藝術與清史研究的重鎮，也是台灣地區最主要的觀光重點。

民國六十四年至七十四年的第六個十年，則為故宮的擴展時期。其間館舍經兩次擴建，文物乃得以分類儲藏整理，以最現代化的設備儲藏，以最先進的方式展覽。除了清宮舊藏文物之外，並廣徵關遺，接受各方捐贈，和作有計畫的蒐購。

民國七十四年至今(八十四)年的第七個十年，是為故宮的興盛時期。故宮度藏逐步成就了上自史前新石器時代，下至乾，嘉以後的近代現代，七千年一脈傳承的華夏民族博物館。

這十年間，我們院區在左側興建了一區足資遊息的「至善園」，一區可供歇腳的「後樂園」以及「中庭點景」和「三希堂」等等，並將在院區右側再興建一區「至德園」，使能環抱映帶，自成其為一片高文化區；第四期擴建工程-圖書文獻大樓，即將於九月間落成啟用。十年以來，我們也舉辦了五次國際性的學術會議，收穫至豐。在此要特別一提的，是完成了故宮自上海以來文物的大清點。四十餘位社會上有清望的學者專家以及故宮管理委員，參與清點，歷時兩年，六十四萬多件文物一件不缺，差可告慰世人。

ここでは、1925 年から 1995 年までの 70 年間を 10 年刻みで論じており、それぞれの時期にいったいどのようなことが行われたのかについて概略述べられている。

さらに 70 周年の記念として出版された『故宮七十星霜』（国立故宮博物院編撰，台湾商務印書館）の「前言」は、この報告を踏まえたものと考えられ、以下に示すように、10 年刻みの記述となっている。

今年是國立故宮博物院建院七十週年。本院自 國父先烈革命開國，溥儀出宮，乃得於民國十四年十月十日成立。

回顧過去，我們可以說：

第一個十年，主要做的是清宮藏品的總清查以及建院，展覽等工作，使千多年承續的宮廷收藏，首次公開陳列在世人面前。無如「九一八」事變接踵發生，為防止日軍的侵略覬覦，文物被迫倉皇裝箱南遷。

第二個十年，仍是過的流離遷徙的歲月。政以文物先安頓在上海，南京，然後又冒險過遍地戰火，上面受著飛機炸彈的空襲，背後又有大炮機關槍追擊，輾轉播遷到西南大後方去，其不被傾覆著幾希。

第三個十年，先是苦守待復，其後雖勝利還都，但不久又因局勢逆轉，而東來台灣，文物暫時存放在台中霧峰北溝山洞，這是舉世博物館界獨一無二的播遷史。

第四個十年，我們開始籌建台北外雙溪的故宮博物院，並於民國五十四年順利落成，公開展示。這裡從此成為了保存研究展示的國寶重鎮。

第五個十年，我們一在擴充展覽場地，並邀集中外學者舉辦過瓷器討論會，古畫討論會……。

第六個十年，本院繼續擴充，興建了行政大樓，並使文物的典藏與展覽，進入恆溫，恆濕，防火，防潮，防震以及二十四小時安全監控的現代化科技維護。

第七個十年，我們又在院區闢建了「至善園」與正在營建中的「至德園」，以及「中庭點景」，「三希堂」，「後樂園」，經營了大家休息心靈的好去處。這十年中間，我們舉辦了五次國際性的學術會議，並完成了故宮文物的大清點，六十四萬多件文物，完整無缺。

回顧過去走過的七十年艱苦歲月，實在是世界博物館史中值得大書特書的一章，可以說世界上沒有任何一個博物館流離遷徙過這麼遠，重建茁壯過程是這麼困難彷彿一首血淚

史詩。

如今，我們可以充滿自信地說：故宮已經成為一個現代化的博物館，特別是已經擺脫了宮廷博物館的規模，而成為了一個傲視一世，一元文化的民族博物院，因為

目前本院藏品全部都是同一民族的文化藝術，上自新石器時代，下至近代現代，前後七千年文化一脈傳承，無或缺失。

おわりに

以上、民進党政権成立後の台北故宮について概観してきた。故宮設立 70 周年と 80 周年、それぞれに示された自らの沿革に対する歴史的な位置付けを通じて見えてくるのは、10 年刻みであるのか、40 年刻みであるのかといった形式的な問題にとどまらないと考えられる。

70 周年のものが、博物院とそこで働く人々がこれまでどのように努力し、どのような行為を行い、いかなる博物院として構築されてきたか、という内向きの記述になっている。それに対し、80 周年のものは、博物院が行ってきた諸活動は、社会や参観者に対し、どのような役割を果たしてきたのか、という博物院と外部との関係を強調した記述になっている。また、将来の展望にまで言及する内容となっている。

これは、台北故宮の諸活動が台湾の人々や海外から台湾を訪れた人々の中華、乃至は中華文化理解にどの程度の影響を与えてきたのかを考える材料となると考えられる。しかしながら、その点を分析するためには、北溝陳列室時、及び 1965 年建設院直後の社会教育活動などを詳細に分析する必要がある。今後の課題としたい。

【参考文献】

(日本語)

- 家永真幸[2007]「故宮博物院をめぐる戦後の兩岸対立(1949-1966)」(『日本台湾学会報』(9))。
板倉聖哲[2008]『伝移模写』『探索亜洲』——台北故宮博物院の展覧会に見る二つの新たな方向性(『東方』(328))。
小暮満寿雄[2008]『堪能故宮』まどか出版。
杜正勝編[2002]『普世の美 人文の粹 国立故宮博物院巡礼』国立故宮博物院。
古屋奎二[1992]『新訂 故宮博物院物語』二玄社。
松金公正[2009]「故宮博物院(北京)・国立故宮博物院(台北)」(長谷川啓之監修『現代アジア事典』文眞堂 357-358 ページ)。
——[2010 予定]「台湾社会の多様性と本土化とのかかわりに関する覚書——『認識台湾』、国立故宮博物院を手がかりに」(宇都宮大学国際学部編『国際学としての「多文化公共

圈」研究』宇都宮大学国際学部)。

森美根子[2008]「台湾・故宮博物院長林曼麗さんを訪ねて」(『ASIAN REPORT』(355))。

林衡道[1974]『故宮博物院と中国文化』青文出版社。

林曼麗[2007]「美術館もひとつの表現です」(『芸術新潮』58(1))。

(中国語)

杜正勝[2001]「認識台北國立故宮博物院講演録」東京國際大學。

馮明珠[1994]「國民政府時期的故宮博物院」國父建黨革命一百周年學術討論会報告論文。

故宮博物院編撰[1995]『故宮七十星霜』台北 台灣商務印書館。

蔣復璁[1977]『中華文化復興運動與國立故宮博物院』台北 台灣商務印書館, 。

杭立武[1980]『中華文物播遷記』台北 台灣商務印書館, 。

林曼麗編[2007]『物華天寶——Old is New 導讀新故宮 Guidebook』台北 國立故宮博物院。

那志良[1957]『故宮博物院參十年之經過』中華叢書委員會。

——[1966]『故宮四十年』台北 台灣商務印書館。

石守謙[2005]『國立故宮博物院 中華民國九十三年年報』國立故宮博物院。

吳淑瑛[2003]「展覽, 文物所有權與文化外交——以故宮 1961 年赴美展覽的交渉為例」『近代中國』(155)。

周密[1985]『國立故宮博物院的建制與沿革』中國文化大學藝術研究所碩士論文 台北。